

シンポジウム
海洋プラスチックごみから
海鳥を守ろう



写真：OWS

2020年2月23日（日） 13:00~17:30

法政大学 市ヶ谷キャンパス G201 教室

主催：（公財）日本野鳥の会、法政大学人間環境学部

シンポジウム・海洋プラスチックごみから海鳥を守ろう！

●●プログラム●●

開 会	13:00
-----	-------

あいさつ 遠藤 孝一〔(公財)日本野鳥の会 理事長〕

趣旨説明 高田 雅之〔法政大学人間環境学部教授〕

第一部：海洋プラスチック問題の現状

基調講演	13:10～14:00
------	-------------

海洋プラスチック問題の危機的な状況

高田 秀重〔東京農工大学農学部教授〕

講演	14:00～14:30
----	-------------

海洋プラスチックによる海鳥や海洋生物への被害

～ミッドウェー環礁からの報告～

横山 耕作〔OWS 代表理事〕

講演	14:30～15:00
----	-------------

海鳥の生態からみたプラスチック汚染の影響

山本 裕〔(公財)日本野鳥の会 自然保護室チーフ〕

休憩	15:00～15:15
----	-------------

第二部：海洋プラスチック汚染をなくすために

講演	15:15～15:40
----	-------------

国内河川のごみの現状と課題

伊藤 浩子〔全国川ごみネットワーク事務局〕

講演	15:40～16:05
----	-------------

日本野鳥の会の活動現場での取り組み

森 初恵〔(公財)日本野鳥の会 チーフレンジャー〕

講演	16:05～16:30
----	-------------

循環基本法や容器包装法改正に向けての取り組み

中井 八千代〔容器包装の3Rを進める全国ネットワーク運営委員長〕

講演	16:30～17:20
----	-------------

海洋プラスチック汚染をなくすために

三沢 行弘〔(公財)世界自然保護基金プラスチック政策マネージャー〕

総括・終了	17:20～17:30
-------	-------------

総括 葉山 政治〔(公財)日本野鳥の会 自然保護室室長〕

●●●講演要旨・講師プロフィール●●●

基調講演：海洋プラスチック問題の危機的な状況

高田秀重〔東京農工大学 農学部 環境資源科学科 教授〕

要旨：世界で年間4億トンのプラスチックが生産されている。その一部は海洋へ流入し、海洋全体で汚染を引き起こしている。プラスチックは紫外線、風波等により劣化して、微細化し、多くの生物に取り込まれるようになり、プラスチック汚染は生態系全体に広がっている。海鳥はその中でも最もプラスチックの影響を受けやすい生物である。我々がプラスチックの大量生産・大量消費をはじめた1960年代から海鳥のプラスチック摂食の報告があり、経年的に増加し、現在では海鳥の9割がプラスチックを摂食しているという推定もある。プラスチック製品には可塑剤、紫外線吸収剤、酸化防止剤、難燃剤、染料など様々な添加剤およびその合成副産物が含まれ、その中には有害化学物質もある。それらの有害な添加剤は微細化したプラスチックにも残留している。さらに海水中では有害化学物質を吸着し、プラスチックはより有害になる。海鳥がプラスチックを摂食することにより、それらの有害化学物質が体内に吸収され、体内の臓器に蓄積することも明らかになってきた。世界的な海鳥の調査の結果、海鳥の少なくとも40%にプラスチック添加剤の蓄積が確認されている。これらの有害化学物質によると思われる海鳥の体内化学物質代謝への悪影響、例えば血中カルシウム濃度の減少やコレステロール濃度の増加などが一部の海鳥では報告され、海洋プラスチック汚染の進行による海鳥の個体数減少、種の絶滅などが危惧される。海洋へのプラスチックの流入を減らしていく必要がある。プラスチック廃棄物の収集を徹底しても集めたプラスチックを燃やすのであれば、温暖化が進行してしまう。埋め立てれば添加剤やプラスチックの分解産物が漏れ出し、河川や地下水を汚染する。リサイクルにも手間もコストもかかる。そもそも全てのポリマーを無限にリサイクルできるわけではない。環境保全と我々の健康を守る視点から、プラスチックの使用自体を減らしていく必要がある。

食物連鎖により、プラスチック製品にもともと含まれる添加剤がヒトへ曝露されることも懸念されます。国際的には予防的な対応がとられ、使い捨てプラスチックの使用自体を削減していこうという取り組みが進められています。

講師プロフィール：専門は環境中の人工化学物質の分布と輸送過程の解明。1998年からプラスチックと環境ホルモンの研究を開始し、2005年以来 International Pellet Watch を主宰している。2012年から2019年まで、国連の海洋汚染専門家会議のマイクロプラスチックのワーキンググループのメンバー。東京農工大学プラスチック削減5Rキャンパスの推進者の一人。信条は、現場百ぺん、予防原則、No single-use plastic!

**講演：海洋プラスチックによる海鳥や海洋生物への被害
～ミッドウェー環礁からの報告～**

横山耕作〔OWS 代表理事・ネイチャーガイド〕

要旨：海洋に流出したプラスチック類は波や紫外線によって次第に小片化しながら半永久的に海洋環境に留まります。それらのプラスチック類は海面で摂餌する海鳥などに誤食され、大きな被害を及ぼしています。また、逸失した魚網やロープ類は塊状となって海面を漂流し、人知れず多くの海洋生物を絡めとって死に至らしめています。

日本を含む東アジア諸国やアメリカなどの沿岸諸国から流出したプラスチック類は、北太平洋上に帯状の集積海域を形成することが知られています。この海域に近い北西ハワイ諸島は、米国の Marine National Monument（海洋国家遺産）に指定された世界最大の海洋保護区で、希少な海鳥や海洋生物の一大生息地です。しかし、近年押し寄せる海洋プラスチック類によるさまざまな海洋生物への深刻な被害が後を絶ちません。本講演では北西ハワイ諸島のミッドウェー環礁での被害例などを中心に、海洋プラスチックごみが引き起こす問題を紹介します。

講師プロフィール：1950 年和歌山県生まれ。1998 年海の環境 N P O、OWS (The Oceanic Wildlife Society) を設立。同年よりミッドウェー環礁自然保護区のビジター受入事業に携わる。

天然記念物アホウドリの世界 3 番目のコロニー誕生に向け、FWS（米国魚類・野生生物局）と長谷川博・東邦大学教授（現 OWS 会長）らが推進したアホウドリデコイ設置と鳴き声の音声発信による誘引・つがい形成作戦に協力。2011 年 6 月の現地調査で巣立ちを確認した。

講演：海鳥の生態からみたプラスチック汚染の影響

山本裕〔(公財) 日本野鳥の会 自然保護室チーフ〕

要旨：生活の大半を海で過ごす海鳥は、スズメなどの小鳥類に較べて長寿命で、産卵数が少ない、塩腺を持つ等の特徴があります。繁殖地に侵入したネズミなどの捕食者や混獲などにより、世界的に減少しており、現在、約 360 種の海鳥のうち約 1/3 の種で絶滅のおそれがあります。

海鳥は広大な海の中から、視覚や臭覚などにより餌を探します。そのため海洋中のプラスチック量の増加とともに、餌と間違えて飲み込んだり、プラスチック表面に吸着する化学物質の臭いに誘引されて摂取することで、海鳥の約 8 割で摂食が確認されています。特に海表面で採餌するアホウドリ科、ミズナギドリ科での摂取率が高く、潜水性の海鳥

では少ない傾向があります。プラスチックの摂食による消化障害のほか、餌生物からの生物濃縮による体内汚染が進み、雛の成長の遅れなどが報告されています。海洋プラスチックの汚染から海鳥を守るには、海への流入や使い捨ての使用量を減らすこと等が大切です。

講師プロフィール：1991年に日本野鳥の会に入局。広島、三宅島のサンクチュアリでレンジャーとして勤務し、2008年より自然保護室。モニタリングサイト1000や日本のマリーンIBA選定を担当後、現在は、海鳥の刺し網混獲対策や野外鳥類学講座、野外鳥類学論文集「Strix」の編集を担当。

講演：国内河川のごみの現状と課題

伊藤浩子〔全国川ごみネットワーク事務局〕

要旨：私たちの身近にある川では、ごみを何度拾っても、なかなか減りません。やがては海へと流れてしまう川ごみは、その内容を調査すると私たちの生活と密接に関わる容器包装類やプラスチック類が多く、街なかから発生していることがわかります。またプラスチックは微細化されて川で既にマイクロプラスチックとなっていることも見られます。

海ごみを削減していくためにも、海に流出する前に川でごみをストップすることが大切です、その発生源対策が求められています。様々な経路から川へ流入してしまうごみを削減していくためには、その原因と考えられるそれぞれについての対応もしていかななくてはなりません。川ごみ削減に向けて市民活動としてできること、私たち個人ができることなどを考えていきます。

講師プロフィール：公益財団法人日本環境協会（こどもエコクラブ全国事務局）、NPO法人荒川クリーンエイド・フォーラム職員、同事務局長を務め、2017年より現職。環境カウンセラー。東京都環境学習リーダー。容器包装の3Rを進める全国ネットワーク運営委員。埼玉県プラスチック問題対策協議会委員。

講演：日本野鳥の会の活動現場での取り組み

森初恵〔(公財)日本野鳥の会 東京港野鳥公園チーフレンジャー〕

要旨：日本野鳥の会では、1981年に北海道にウトナイ湖サンクチュアリを設置しました。これを手始めに、当会自ら運営するサンクチュア리를2ヶ所、地方自治体からの受託や指定管理者として7ヶ所の施設を管理しています。サンクチュアリには、レンジャー

一と呼ばれる専門の職員がいて、保全のための調査や自然環境の管理、自然体験などの教育活動を行っています。

地域の自然保護活動の拠点となるサンクチュアリの中には、海に面している場所もあり、海洋ゴミの問題に直面することも多くあります。北海道根室市「春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンター」・東京都三宅村「三宅島アカコッコ館」・東京都大田区「都立東京港野鳥公園」の海に面する3つの現場の事例から、それぞれの取り組みを紹介します。

講師プロフィール：神奈川県横浜市で生まれ育ち、2003年よりレンジャーとして横浜自然観察の森に勤務。

2015年からは東京港野鳥公園に勤務し、現場にて海洋ゴミ問題に取り組む。

講演：循環基本法や容り法改正に向けての取り組み

中井八千代〔容器包装の3Rを進める全国ネットワーク運営委員長〕

要旨：私たちは、戦後の高度経済成長により物質的な豊かさを享受するようになりましたが、反面「使い捨て」というライフスタイルを生み出し、ごみ排出量を増大させました。ごみを出さずにはいられない生活を強いられているといっても過言ではありません。海ごみの問題は、「軽くて強く、安く大量生産できるプラスチック」に依存する今日の大量生産・大量消費の社会に根源的な問題を投げかけるものです。

これを解決するためには、消費者の便利な暮らしを見直すことはもちろん生産の見直しも不可欠です。産業や暮らし方をこれまでにないほど大きく変革すること(Transforming)が必要です。そのためには”これまでにない施策”が必要であり、事業者の「自主取り組み」では不十分なことは明らかです。地球規模のプラスチック廃棄物や気候変動の問題を解決するためには、廃棄後の責任は事業者が担うとする拡大生産者責任(EPR)の徹底や、CO2を見える化する「カーボンプライシング」の導入など、新たな法規制が必要なのです。

講師プロフィール：中央環境審議会循環型社会部会 容器包装の3Rに関する小委員会委員、環境カウンセラー、廃棄物資源循環学会評議員・編集委員、グリーン連合役員。

講演：海洋プラスチック汚染をなくすために

三沢行弘〔公益財団法人世界自然保護基金ジャパン
プラスチック政策マネージャー〕

要旨：海洋プラスチック汚染は、野生生物や自然環境のみならず、社会、経済面でも、既に世界的に大きな被害をもたらしており、十分な対策をすぐに打たなければ、この被害はますます拡大し続けることとなります。もはや海洋プラスチック汚染は、地球への深刻な脅威となりつつあるのです。

2019年6月のG20大阪サミットでは、この問題への危機感を共有する主要国首脳により、世界で2050年までに新たなプラスチックごみの海洋流出を無くすとする「大阪ブルーオーシャンビジョン」が示されました。これをより早い時期に達成するためにも、世界各国が協力し、法的拘束力のある国際的な解決枠組みを早急に創設することが必要です。

加えて、各国、各都市、各企業、各個人自らが、高い意志や目標を持ち、協力してこの脅威に立ち向かっていかなければなりません。

WWFではプラスチック汚染問題を解決するための活動を世界で推進していますが、この問題解決におけるWWFジャパンの責任者として、これらの動きについて解説します。

講師プロフィール：企業等で国内外の事業の企画・推進に携わった後に、世界自然保護基金ジャパン（WWF ジャパン）に入局。「2030年までに世界で自然界へのプラスチックの流入を無くす」というWWFのビジョン実現に向け、政策決定者や企業関係者に働きかけ、プラスチックの大幅削減を前提とした資源循環型社会の構築に向けて取り組む。また、企業の持続可能な水産調達への転換を推進。



マイボトルの利用も、プラスチックごみを
減らす第一歩。
日本野鳥の会オリジナル
アホウドリの水筒ができました。

